

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870022

研究課題名(和文) 草創期国際政治学の文化論 L・ウルフとH・ニコルソンの比較から

研究課題名(英文) Cultural Critiques in Interwar International Studies: Leonard S. Woolf and Harold Nicolson

研究代表者

西村 邦行 (NISHIMURA, Kuniyuki)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70612274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：理想主義者とされてきたL・ウルフと、現実主義の外交論者とされてきたH・ニコルソンについて、文化史上における両者の近さを手掛かりに、その文化論と政治論のつながりを比較検討した。特に大戦間期の諸著作を中心に、各々の未公刊史料(英サセックス大学、米プリンストン大学、米イェール大学)も併せて収集検討した。そこから、双方とも、文化論と政治論のあいだで一定のつながりがあったことを明らかにし、その学説史上の意味について示唆を与えた。

研究成果の概要(英文)：According to a popular understanding about the disciplinary history of International Relations (IR), L. S. Woolf is an idealist and H. Nicolson a realist. On contemporaneous cultural settings, however, the distance between the two intellectuals was far from great. Reading their works in interwar years (along with their unpublished materials in Sussex, Princeton and Yale), this study examined how their respective view on culture was connected to their political ideas. This study uncovered such connection and also shed some light on its meaning for the history of IR.

研究分野：国際関係論

キーワード：レナード・ウルフ ハロルド・ニコルソン 現実主義 理想主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、以下のような学界での動きと研究代表者自身の研究を背景に計画されたものであった。

まず、学界での動きとしては、次のような学説史研究の流れがあった。個人・集団の行動を条件づける共通認識への注目の増大は、グローバル化の進展による文化的摩擦の加熱にも呼応して、1990年代以降の国際政治学を特徴づけてきた。他方、とりわけ2000年代以降は、同分野を切り拓いた第二次世界大戦前の研究者たちにおいて早くも、国内・国際社会の基盤を文化的なものに求める視点のあったことが指摘されるようになってきた(例えば、Bell 2009)。諸国家間の社会を展望し始めた草創期の国際政治学者たちは、人間の共同体秩序が並べて何らかの文化的な紐帯に依拠しているとの認識から出発していたというのである。

この知見に鑑みれば、国際政治学はそもそも一種の文化論として開始されたということになる。その上で、代表者もこれまで、この論点と関わる研究を進めてきていた。具体的には、国際政治学の祖 E・H・カー(1892-1982)の理論に関する思想的な観点からの再検討がそれである。特に代表者が行ったのは、主著『危機の二十年』(1939年)を、彼のそれ以前のドストエフスキー伝および各種文芸評論との連続性から読みなおし、彼の政治理論の基盤にある文化・文明論的な視点の存在を明らかにすることであった(西村 2012a)。特に本研究開始時は、そこから、カーの周辺へと対象を広げ始め、『危機の二十年』の主要な批判者であったウルフ最初期の政治評論についても、独自のヨーロッパ文明観を背景としていた点を論証していた(西村 2012b)。

<引用文献>

Bell, D. (ed.) 2009. *Political Thought and International Relations: Variations on a Realist Theme*. Oxford University Press.

西村邦行. 2012a. 『国際政治学の誕生 E・H・カーと近代の隘路』昭和堂.

西村邦行. 2012b. 「技術・文明・国際社会初期レナード・ウルフの評論から」『比較文明』28号.

2. 研究の目的

以上のような背景を受けて、本研究は、草創期国際政治学における文化論的視座の意味をさらに掘り下げて検討することを目的としたものである。その上で、ウルフとニコルソンという二人の人物を並べて考察することには、以下の点からテーマに沿うものと考えられた。

一般に、大戦間期の国際政治学は、カーの

叙述に従って、理想主義者たちの規範的言説を現実主義者たちの客観的分析が退けるところに開始されたと理解されてきた。この図式に従うと、『危機の二十年』の批判者ウルフは理想主義者であるのに対し、同時代における新しい外交の在り方を分析したニコルソンは現実主義者であるとされる。つまり、二人を対照的な位置に据えるのが、従来の国際政治学史上の理解であった。他方、近年、理想主義も権力政治の実態を捉えた分析的な視座であったし、他方の現実主義も独自の道徳的展望を含んでいたとされてきた。現実主義対理想主義という図式の有効性は疑問に付されてきたわけである(例えば、Schmidt 2012)。

その上で、ウルフとニコルソンとは、同時代の歴史的な文脈において見るとむしろ近いところに位置する面もあった。彼らは、ともに知識人集団ブルームズベリー・グループに関わり、種々の文学評や文学者の伝記を物すなど、文化史上はむしろ同列に並べうる位置を占めていたのである。

この点、ウルフとニコルソンとは今日の国際政治学史上研究において魅力的な対象と言えるわけであるが、他方で双方についてのまとまった研究は限られている。ウルフについては、吉川(1989)およびWilson(2003)があるが、狭い意味での政治を対象としており、その文化論にはほとんど目を向けていない(本研究期間中の終わりには藪田(2016)も刊行されたが、この点は同書にも当てはまる)。ニコルソンについては、Drinkwater(2005)があるが、こちらについても同様である。

そこで本研究では、以下の3点を目的に掲げた。

- ・ウルフとニコルソンの政治思想の解明
これまで必ずしも十分に検討されてきていない両者の政治理論を、特に彼らの文化観・審美観を探るところから、各々の思想体系全体の中に位置づけて明らかにする。
- ・草創期国際政治学の歴史的な位置の解明
文化と政治という問題を軸に、草創期の国際政治学がいかなる思想的な背景から生まれてきたのかを明らかにする。
- ・草創期国際政治学の現代的意義の解明
文化論的な視座が注目される現代、やはり文化に着目した草創期の国際政治学はどう再評価できるのか、またそこから国際政治学のいかなる将来的展開が可能かを明らかにする。

<引用文献>

Drinkwater, D. 2005. *Sir Harold Nicolson and International Relations: The Practitioner as Theorist*. Oxford University Press.

- Schmidt, B. (ed.) 2012. *International Relations and the First Great Debate*. Routledge.
- Wilson, P. 2003. *The International Theory of Leonard Woolf: A Study in Twentieth Century Idealism*. Palgrave.
- 藪田有紀子. 2016. 『レナード・ウルフと国際連盟 理想と現実の間』昭和堂.
- 吉川宏. 1989. 『1930年代英国の平和論 レナード・ウルフと国際連盟体制』北海道大学図書刊行会.

3. 研究の方法

ウルフとニコルソンの著作の内、本研究では特に、彼らの大戦間期の著作を焦点に、テキストの読解を行った。また、両者の未公刊史料についても、関連するものを収集検討した(ウルフについては英サセックス大学所蔵、ニコルソンについては米プリンストン大学およびミエール大学所蔵)。並行して、当時の文化史的な文脈についても検討を行った。特に、当時の文芸評論の動向に関連してとりわけ影響力のあった『スクルーティニー (Scrutiny)』誌など、いくつかの雑誌メディアに関する研究を追った。

4. 研究成果

(1) 研究結果の概要

計画の時点からいくらか予想されていた点ではあったが、研究開始当初から一つ問題となったのが、ウルフとニコルソン双方の執筆スタイルである。とりわけ後者については、既存研究でも批判的な評価があるように、時評的・实际的と言うべき著作が多く、テキストから思想的な一貫性をあぶりだすことに困難があった。そこで本研究では、両知識人の文化論を比較検討するにあたり、双方のより基底的な人間観・人生観にまで遡ることを試みた。

この点は、ウルフについては比較的明瞭に種々のテキストから跡付けることができた。というのも、彼は、公刊・未公刊の様々な著作で同様の虚無的な人生観を繰り返し述べているからである。20代の青年期において彼は、例えば同時代の文芸評論家リットン・ストレイチャー宛の書簡において、人の人生一般を、未来における死を目標とした半死人様のものとしている (Spotts 1989: 35)。その同様の見立ては、晩年の自伝において、人生を「非存在から非存在へ」と描く表現 (Woolf 1960: 11) あるいは、人がその一生で見てくるものはとどのつまり表象ではないかとする表現とも通底するものがある (Woolf 1964: 13)。同様の鬱屈とした感覚は、執筆時不詳の未公刊のノート類や詩編でも何度か表明されている。さらに、こうした虚無感、妻で作家のヴァージニアなど、同時代の周辺の知識人にも多かれ少なかれ共有されていた

(シェルキンド 1983)。

こうした虚無感が生まれるということは、自身(人間)が世界と切り結ぶその形があやふやだということである。その点において、世界を把握する手段としての理性に彼が向けていた疑念は、この人生観と一定の相関関係を有していたと考えられる。

彼の文芸・政治両評論においては、人間が動物とも変わらない存在に過ぎないとの視座が繰り返し現れている。例えば、芸術的価値とは何かをめぐって知識人の社会的位置を査定する上でも、彼は、宗教から政治に至るまで、社会を形成しているのが「錯覚と偏見の上部構造」であるとし (Woolf 1927: 44)、人間社会が基本的には浮動的な情念で動かされている様子を観察している。

ウルフの議論はしばしば文明史の流れに触れる形で展開されてもいる。こうして人間が非合理的な存在でいるのも、元々人間とは動物に過ぎないからである。そこにまずは原始的な宗教が入り込むことで一定の規範が形成された。その後はさらにこの呪術的段階をも脱していく中、人間行動に理性が課す制約はより洗練された形をとった。しかしなお未開人の心性は残っており、「野蛮人は...いつも私たちの文明の壁の内側に、私たちの精神や心の中にいる」のである (Woolf 1939: 83)。同時代ヨーロッパにおけるファシズムの胎動にしても、こうした人間観および文明史観を基に批判が試みられていた。これらの知見からすると、ウルフの(国際)政治論も、理想主義か現実主義かという形で問うにふさわしいものではなく、より認識論的な次元からその位置づけが探られるべきであろう。

他方のニコルソンもまた、その人間観にまで遡ったときに、虚無的なものを内に含んでいた。それは例えば、息子に向かって自身を陳腐なボヘミアンと表現する点に現れている (Nicolson 1997: 2)。ただ、彼の場合には、そうした情念は多くのテキストの上で必ずしも明確に示されていたわけではない。また、今回は大戦間期に射程を絞った関係から十分には検討しえなかったが、そうした情念も、時代を下るほどに、より楽観的なものに置き換わっていったように思われる。長く日記を記し続けたことで知られる彼であるが、その日記においても、ときどきの生活の中での苦悩などは触れられるが、思想的と言える次元での自己省察は為されていない。

彼の感傷はむしろウルフら前衛的知識人が批判的に見ていた19世紀的な文人のそれに近かったようにも思われる。確かに一方で彼は、当時の文芸評論界隈において一定の評価を得てはいた。例えば、彼の比較的初期の作品にあたる『テニソン』(Nicolson 1923)などは、この詩人の具体的生活環境と生との関連に光を当てたものとして、同時代の文芸評論家にも高く評価された (エンブソン 2006: 71、原著は1930年)。また、事実とフィクションを混在させたスタイルの伝記で

ある『あの人この人』(Nicolson 1927)にはウルフの妻ヴァージニアも称賛を与えていた(Nicolson and Trautmann 1978: 392)。他方、そのヴァージニアも含むブルームズベリー・グループの面々は概して、ニコルソンに低い評価しか与えなかったし、彼の方でもグループを嫌っていた(例えば、Lees-Milne 1980: 200-5)。

こうした側面は、より見えにくい形ではあれ、1930年代に彼が妻ヴィタ・サックヴィル＝ウェストと造りあげたシシングハースト庭園の意匠にも反映されていたかもしれない。自然の不均一性の中にも一定の均整を与えようとするその庭園の思想は、絶対権力を否定する政治観や、観念的体系性よりも経験主義に傾いた哲学志向など、イギリスの文化的特質にも合致するものとされる(例えば、中尾 1999)。ただ、その庭園造園にあたっては、植物の不規則な配置を担当したのがヴィタの方であったとすれば、古典的な幾何学的構造を重視して規則的な枠組みを担当したのがハロルドであった(Nicolson 1997: 211-2)。

ニコルソンも鬱々としたものを内に抱えてはいた。しかし、それは人生の淡さに関する根源的な問題意識を反映したものというよりも、職業や生活に関する具体的な不満に基づいたものであった。上のような伝統主義者としてのニコルソンはむしろ、人間理性の射程についてより楽観的な見通しを有していた。この点は国際政治に関わるにおいても反映されていたように思われる。『外交』(Nicolson 1939)におけるヨーロッパ人文主義の伝統としての外交という視座は、今日まで教科書的な理解を提供し続けている一方、そこにおける近代啓蒙的な価値前提については、批判的な指摘が現れ始めているところである(Neumann 2012: 21-31)。

(2) 得られた知見と今後の課題

当初の目的との関係から整理すると、本研究で得られた知見と今後の課題とは以下のとおりである。

・ウルフとニコルソンの政治思想の解明

ウルフについては、その心理学的な思惟様式を軸として政治論への接近を図る一つの道筋を見いだすことができた(成果論文)。今後は、今回扱ったのに先立つセイロン統治官僚時代との兼ね合いなども含めたより長い時間軸において、この思惟様式の変遷を考察する必要がある。

他方、ニコルソンについては、具体的な基軸を掘り起こすには至らなかった。ただし、その審美観と政治観との連続性を探るという方途自体は、一つのアプローチとしてなお有効であるように思われる。今後は、今回扱った大戦間期における文芸作品の作法とより後の時期のいくつかの浩瀚な伝記作品におけるそれとの違いなどを検討する必要がある。

ある。また、上に触れた庭園の諸特徴についても、英帝国の盛衰といった他の文脈との兼ね合いから見ていくことも考えられよう。あるいは、ニコルソンの政治観を知る上では、彼の政治家としての活動も重要であろう。特に一時期コミットしていたオズワルド・モズレーの「新党」との思想的関連は、今後とりわけ検討を要する課題である。差しあたっては、これらの課題を確認できたことが一つの成果であった。

・草創期国際政治学の歴史的位置の解明

研究代表者のこれまでの視座が、同時代のより多様な論客についても一定程度当てはまることが確認できた。また、そこから翻って、これまで扱ってきたカーについても、ウルフとの関係から改めてその著作を捉えなおすための若干の展望を得た(成果論文、に反映)。関連して、現実主義という語彙自体についても系譜学的に再検討する意義を確認した(成果図書に反映、H28年度から個人研究として遂行予定)。

・草創期国際政治学の現代的意義の解明

特にウルフにおける文化論と政治論とのつながりは、それ自体として、現実主義や構成主義をめぐる今日の諸理論の研究との兼ね合いでも示唆的であった。今後は、その具体的な関係性を認識論・方法論的な次元でも検討していくことが考えられる。

他方、ニコルソンについても、その伝統主義者然とした言説が今日なお影響力を有している点について、系譜学的な視点から再検討する必要性について展望を得た。今後、ニコルソン自身の思想体系の解明と並行して進めていきたい(H28年度からの共同研究の枠内で遂行予定)。

<引用文献>

- Lees-Milne, J. 1980. *Harold Nicolson: A Biography, vol. 1 1886-1929*. Chatto & Windus.
- Neumann, I. B. 2012. *At Home with the Diplomats: Inside a European Foreign Ministry*. Cornell University Press.
- Nicolson, H. 1923. *Tennyson: Aspects of His Life, Character and Poetry*. Constable.
- Nicolson, H. 1927. *Some People*. Houghton Mifflin.
- Nicolson, H. 1939. *Diplomacy*. T. Butterworth. (斎藤真・深谷満雄訳『外交』東京大学出版会、1968)
- Nicolson, N. 1997. *Long Life: Memoirs*. Wiedenfield & Nicolson.
- Nicolson, N. and Trautmann, J. eds. 1978. *The Letters of Virginia Woolf, vol. 3: 1923-1928*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Spotts, F. ed. 1989. *Letters of Leonard Woolf*. Harcourt Brace.

- Woolf, L. S. 1927. *Hunting the Highbrows*.
The Hogarth Press.
- Woolf, L. S. 1939. *Barbarians at the Gate*.
Victor Gollancz.
- Woolf, L. S. 1960. *Sowing: An
Autobiography of the Years 1880-1914*.
The Hogarth Press.
- Woolf, L. S. 1964. *Beginning Again: An
Autobiography of the Years 1911-1918*.
The Hogarth Press.
- エンブソン, W. 2006. 『曖昧の七つの型(上)』
岩崎宗治訳、岩波書店.
- シエルキンド, J. 編 1983. 『存在の瞬間
回想記』近藤いね子他訳、みすず書房.
- 中尾真理. 1999. 『英国式庭園 自然は直線
を好まない』講談社.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

西村邦行「レナード・ウルフにおける自我
と社会 戦間期理想主義の政治心理学」
『北海道教育大学紀要 人文科学・社会
科学編』65巻1号(2014年) pp. 59-74。
(査読なし)

西村邦行「世界にとどまる E・H・カー
『歴史とは何か』の政治思想」『北海道
教育大学紀要 人文科学・社会科学編』
65巻2号(2015年) pp. 13-28。(査読
なし)

[図書](計1件)

押村高、木村俊道、神島裕子、松森奈津子、
高橋良輔、西村邦行、内田智、前田幸男、
青木裕子、岸野浩一、寺島俊穂 『政治概
念の歴史的展開 第7巻』晃洋書房、2015
年、249pp(担当箇所 pp. 107-123)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 邦行 (NISHIMURA KUNIYUKI)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70612274

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし